
盤上航海

陶人舎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盤上航海

【Nコード】

N2451Q

【作者名】

陶人舎

【あらすじ】

世紀末前に起きた悲劇の航海日誌

鳴らない汽笛（前書き）

船乗り。それは世界中の海を渡り、荒れ狂う気象・海象を予測、安全第一をモットウに日や船の上で牢獄の様な生活をしている。

これは一人の青年が体験した一年間の航海日誌である。

鳴らない汽笛

1998年6月13日。

僕が船に乗りはじめてちょうど一年がたった。

高校卒業から地元の小さな海運会社に就職。船の専門知識はなかったが、募集船員に資格、乗船履歴無し可、と書いてあったため試しに面接試験を受けるとあっさりと内定がもらえた。

よほど船員が足りないのだろうか？資格も無く船に乗ったことのない俺をとるなんて。

最初は滑り止めくらいにでもいいから内定が欲しかった。

他にも就職を探そうとしたのだが、これ以上探してなんになる。資格もない俺がどの職業に就こうが、初めてだからどれも一緒だろう。どうせ働くなら給料のいいところがいいに決まっていると勝手に思い込んだからである。しかしこの時の俺の考えがこれからの人生を大きく変える結果になるとはまだわからなかった。1997年6月12日。

この日は、梅雨前線が本州全土に広がりどこも雨が降っていた。

明日から俺は船に乗る。

母親と祖母が駅まで見送りに来てくれた。

「いつてらっしゃい。」

母が言った言葉はそれだけであつた。

祖母はなにも言わず俺の手を握りしめ、「少ししかないけど」と言つた。手のなかにはしわくちやな一万円札が何枚も入っていた。電車が来た。

母は電車がホームに着く前に車に戻ってしまった。

祖母は両手を顔を被せ、震えていた。

電車のドアが開く。

乗ろうとしたその車両には一人も乗客は乗っていないかった。

祖母はいつまでも顔を隠したまま動かなかつた。

そして電車は発車した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2451q/>

盤上航海

2011年1月26日09時28分発行